日本と第一次世界大戦

石津　朋之

はじめに

2014 ～ 18 年は第一次世界大戦 100 周年に当たり、これを契機として既にヨーロッパ諸国を中心として歴史の見直し作業が活発に行われている。

他方、近年、海上自衛隊がインド洋での給油活動やソマリア沖・アデン湾における海賊対処の活動を行ったこともあり、また、こうした活動が日本から遠く離れた地域でのものであったこともあり、第一次世界大戦における日本海軍の地中海での護衛任務に対する関心が高まった。

もちろん、時代状況も期待された任務も全く異なる第一次世界大戦での海軍の活動と今日の海上自衛隊の活動を短絡的に結び付けることは厳に慎まなければならないが、同時に、こうした今日の時代の要請を一つの契機として、日本であまり話題に上ることがない第一次世界大戦の様相、とりわけこの戦争での日本の関与について知ることも決して無駄ではないであろう。

第一次世界大戦とその衝撃

1914 年夏に勃発した第一次世界大戦は「全ての戦争を終わらせるための戦争」と言われた。当初、この戦争は速やかに、遅くてもクリスマスまでには終結すると考えられたが、現実には 4 年以上もの長きにわたって続く「総力戦」となった。この戦争での犠牲者数は兵士･民間人を合わせて最低でも推定 2,000 万に上った。

この戦争についてウィンストン・チャーチルは後年、「第一次世界大戦以降、戦場から騎士道精神が失われ、戦場は単なる大量殺戮の場へと化した」と回顧しており、また、歴史家ポール･ケネディは 20 世紀の終わりを迎えた 1999 年に、この戦争が 20 世紀をおおった影は、「以前にも増して長く、より暗く、より威圧

的になっているように思われる[1]」と指摘している。さらにケネディは、第一次世界大戦が近代において他のいずれの戦争よりも歴史の道筋を変え、また、この戦争の起源、過程、そして結果は、20 世紀を理解するための鍵であるとさえ述べている。

一方、同じく歴史家ジョン・キーガンはこの戦争に対して、「その遂行方法は残酷、結果は破壊的で恐るべき戦争であった。ここに 20 世紀の病根の殆どが由来している[2]」と厳しい評価を下している。

確かに、21 世紀を迎えた今日でも多くのヨーロッパの人々にとって「あの戦争」とは、第二次世界大戦ではなく第一次世界大戦を意味する。今日に至るまで休戦が成立した 11 月 11 日という日は、ヨーロッパの人々にとっては特別な意味を有する時である。筆者は、この時期にヨーロッパ各地を訪問することにしているが、とりわけフランスやベルギーといったヨーロッパ大陸諸国では今日でもこの日は「休戦記念日」として、どんなに小さな町や村でも戦没者慰霊式典が行われている。

もちろん、第一次世界大戦の衝撃はヨーロッパだけに留まるものではなく、この戦争で大きな戦いの場となった「アルゴンヌ」や「ベローウッド」という地名がアメリカ国民に対して持つ意味、「ヴィミー」がカナダ国民に持つ意味、さらには、「ガリポリ」という地名がオーストラリア及びニュージーランド国民に持つ意味を考えただけでも、第一次世界大戦の影響は極めて大きなものであったと言える[3]。例えば、オーストラリアのメルボルンにある戦争慰霊堂のプレートには「忘れるなかれ、ガリポリ――1915 年 4 月 25 日、この日一つの国民が誕生した」と記されているそうである。

また、ジャン・ルノワール監督――著名な印象派画家ピエール＝オーギュスト・ルノワールの次男で自身もこの戦争に参戦。ちなみに、太平洋戦争当時、珠玉の戦争画を描いた藤田嗣治は第一次世界大戦中パリに滞在していた――による

1　Paul Kennedy, “In the Shadow of the Great War,” *The New York Review of Books* (August 12, 1999).

2　John Keegan, “A Dreadful War,” *RUSI Journal* (June, 1999).

3　木畑洋一「総力戦としての二つの世界大戦」木畑洋一編『20世紀の戦争とは何であったか』（『講座戦争と現代』第2巻）大月書店、2004年。

「大いなる幻影」という、第一次世界大戦中のドイツの捕虜収容所を舞台とした1937年製作のフランス映画を憶えている方も多いであろう。この中で、収容所長のドイツ軍将校と捕虜のフランス軍将校は共にヨーロッパ貴族階級に属しており、敵・味方とは言えどこか互いに通じ合うものがある。なぜなら、彼らはこの戦争で「貴族の時代は終わった」との認識を共有するようになったからである[4]。

この映画に見事に象徴されているように、第一次世界大戦は一つの時代の終わりを告げる戦争であり、同時に、一つの時代の幕開けを告げる戦争であった。

実際、この戦争での犠牲者が比較的少ないとされるイギリスですら、その将校の多くは同国のエリート階級の子弟を教育するパブリック・スクール（私立高校）と大学の卒業生及び在校生であった。例えば、この戦争に従軍した5,588名のイートン校卒業生のうち、1,159名が戦死し、1,469名が負傷したとの記録があり、また、ケンブリッジ大学のあるカレッジでは、全学生の27パーセントが戦死したとの記録が残っている。こうした世代を今日でも、イギリス国民は特別な意味を込めて「1914年の世代」あるいは「失われた世代」と呼んでいる[5]。

前線の兵士だけではなく、銃後の全ての国民の参加を不可欠とした第一次世界大戦――しばしば総力戦と表現される――においては、どうしても全ての国民が納得できる戦争目的が必要とされ、それが後年の無条件降伏政策へと発展する。また、科学・技術、大量生産、そして中央集権化された政府といった言葉に代表されるこの当時の社会的な要因が、第一次世界大戦の様相、とりわけその破壊の規模の大きさを規定したことは言うまでもない。

その結果、「国民総武装（Nation in Arms）」といったナポレオン戦争時代の概

4　詳しくは、荒井信一著『戦争責任論――現代史からの問い』岩波書店、1995年;尾鍋輝彦著『第一次世界大戦』（『20世紀』第5巻）中央公論社、1979年;福井憲彦著『世紀末とベル・エポックの文化』山川出版社、1999年を参照。

5　Brian Bond, *A Victory Worse than a Defeat?: British Interpretations of the First World War* (London: Liddell Hart Centre for Military Archives, 1998); Brain Bond, *The Pursuit of Victory: from Napoleon to Saddam Hussein* (Oxford: Oxford University Press, 1998)（ブライアン・ボンド著、川村康之監訳『戦史に学ぶ勝利の追求――ナポレオンからサダム・フセインまで』東洋書林、2000年）；ブライアン・ボンド著、川村康之訳、石津朋之解説『イギリスと第一次世界大戦――歴史論争をめぐる考察』芙蓉書房出版、2006年、特に「解説」の2つの章；ブライアン・ボンド（石津朋之訳）「英国と第一次世界大戦――準備不足に対する高すぎた代償」『戦略研究』（第2号、2005年）；ブライアン・ボンド「『総力戦』へのアプローチ　1890－1918――第一次世界大戦とその遺産」『平成11年度安全保障国際シンポジウム報告書』（防衛省防衛研究所、2000年）。

念は、「国民総戦時（Nation at War）」というさらに大きな戦争の概念に取って代わられることになる[6]。すなわちこれは、第一次世界大戦においては国家が兵器や食糧を生産してその兵士に供給することが、兵士そのものの質よりも遥かに重要になってきたことを示唆したのである。

また、総力戦としての第一次世界大戦は戦後のヨーロッパ社会、さらには国際社会全体にも大きな衝撃を与えた。例えば、この戦争の経験がもたらした社会の変革への強い志向性は、第一次世界大戦後の世界が生んだ新たな運動及び体制であるファシズムにも強い影響を及ぼしていた。兵士や物資などの効率的な総動員体制をいかに構築すべきかとの問題は、第一次世界大戦後の時代にあらゆる国家が直面した共通の課題であり、そして、こうした課題に応えるべく多様な政治的実験が試みられ、その代表的なものがファシズムであったが、リベラル民主主義が定着しているとされるイギリスですらその例外ではなかった[7]。

そして、こうした運動や体制の中から多数の革新的な人物が登場することになるが、彼らの多くは政治、経済、そして社会全体に対するする強烈なヴィジョンを抱いていたのであり、明らかにこれは、総力戦としての第一次世界大戦に対する彼らの鋭利な認識と関係していた[8]。

6　Michael Howard, *The First World War* (Oxford: Oxford University Press, 2002)（マイケル・ハワード著、馬場優訳『第一次世界大戦』法政大学出版局、2014年）; Hew Strachan, ed., *The Oxford Illustrated History of the First World War* (Oxford: Oxford University Press, 1998); Ian F. W. Beckett and Keith Simpson, eds., *A Nation in Arms* (Manchester: Manchester University Press, 1985).

7　総力戦と社会一般の様相について詳しくは、Manfred F. Boemeke, Roger Chickering and Stig Förster, eds., *Anticipating Total War: The German and American Experiences, 1871- 1914* (Cambridge: Cambridge University Press for The German Historical Institute, 1999); Stig Förster and Jörg Nagler, eds, *On the Road to Total War: The American Civil War and the German Wars of Unification, 1861–1871* (New York: Cambridge University Press, 1997); Roger Chickering and Stig Förster, eds, *Great War, Total War: Combat and Mobilization on the Western Front, 1914–1918* (New York: Cambridge University Press, 2000); Roger Chickering, Stig Förster and Bernd Greiner, eds, *A World at Total War: Global Conflict and the Politics of Destruction, 1937–1945* (New York: Cambridge University Press, 2005); Roger Chickering and Stig Förster, eds, *The Shadows of Total War: Europe, East Asia, and the United States, 1919–1939* (New York: Cambridge University Press, 2003) などシュティーク・フェルスターを中心とする一連の著作を参照。

8　Williamson Murray, Tomoyuki Ishizu, "Introduction to Japan and the United States," in Williamson Murray, Tomoyuki Ishizu, eds., *Conflicting Currents: Japan and the United States in the Pacific* (Santa Barbara: Praeger, 2010), pp. 1- 17.

日本の関与

このように国内及び国際社会に大きな変革をもたらすことになる第一次世界大戦に、日本は1914年8月23日、ドイツに対して宣戦布告することで参戦した。

確かに、この戦争での日本の関与はヨーロッパ主要諸国やアメリカなどと比べて決して大きなものとは言えない。だが、それでも日本は、今日の人々の想像以上にグローバルな地域で関与していたことも事実である。この戦争での日本の関与は便宜上、以下の4つに分類することができる。

第一は、アジア太平洋地域、さらにはインド洋での関与であり、青島（チンタオ）上陸作戦などを例外とすれば、これらは主として海軍によるものであった[9]。この中には、西太平洋のドイツ領南洋群島（マーシャル諸島、カロリン諸島など）の占領、マクシミリアン・フォン・シュペー提督指揮下のドイツ東洋艦隊の追跡（インド洋でのドイツ軽巡洋艦「エムデン」の追尾を含む。また、東洋艦隊の追跡は、その後の「コロネル沖海戦」や「フォークランド沖海戦」につながる）、オーストラリア及びニュージーランド軍の護送、太平洋のほぼ全域にわたる哨戒、さらには、1915年2月にシンガポールで起きたインド人兵士による反乱の鎮圧などが含まれる。

第二は、1918年から開始されたいわゆる「シベリア出兵」である[10]。この出兵はその後、1922年（北樺太の保障占領を含めれば1925年）まで継続されることになるが、日本はこのために総数で7万以上もの兵士をシベリア地域に派遣した。

この出兵のそもそもの目的は、第一次世界大戦中にロシア側（あるいは連合国側）に自ら降伏していたチェコ兵（当時はオーストリア＝ハンガリー帝国軍の一

---

[9] 第一次世界大戦への日本に関与について詳しくは、Ian H. Nish, *The Anglo- Japanese Alliance: The Diplomacy of Two Island Empires 1894-1907* (London: Athlone Press, 1985), pp. 23- 95; Phillips O'Brien, *The Anglo-Japanese Alliance* (London: Routledge/Curzon, 2004); Ian H. Nish, *Alliance in Decline: A Study in Anglo-Japanese Relations 1908- 23* (London: Athlone Press, 1972), pp. 115- 157; Peter Lowe, *Great Britain and Japan, 1911-1915: A Study of British Far Eastern Policy* (London: Macmillan, 1969), pp. 177- 219; Frederick R. Dickinson, "Japan" in Richard F. Hamilton, Holger H. Herwig, eds., *The Origins of World War I* (New York: Cambridge University Press, 2003), pp. 300-336; S. C. M. Paine, *The Wars for Asia 1911- 1949* (New York: Cambridge University Press, 2012), pp. 13- 47; Jonathan Bailey, *Great Power Strategy in Asia: Empire, Culture and Trade, 1905- 2005* (Oxford: Routledge, 2007), pp. 61- 84 などを参照。

[10] 麻田雅文著科『シベリア出兵――近代日本の忘れられた七年戦争』中公新書、2016年。

員としてやむを得ず参戦していたが、民族の独立を求めてその多くが戦線を離脱していた）を共産主義革命後、さらにはドイツと新たに誕生した政権の停戦及び講和が模索される中、いかにしてヨーロッパ戦線に戻すかとの問題を解決するため、そして、それまでロシア領内に保管されていた膨大な量の軍事物資がドイツ側にわたることを阻止するためであったが、当然ながら、状況の推移と共に日本側の出兵目的も拡大することになった。

第三は、連合国側に対する武器と弾薬の輸出である[11]。この事実は今日、ヨーロッパ諸国の歴史家にもあまり認知されていないが、例えば1916年のロシア軍による「ブロシロフ攻勢」が日本の武器弾薬なしでは実施し得えなかったであろうとの評価が存在するように、ロシアに対する日本の武器輸出は相当な量に上った[12]。また、日本はフランスに対しても同様の武器輸出、さらにはフランス海軍のために12隻の駆逐艦を建造している。もちろん日本は、日英同盟での同盟国であるイギリスに対しても、海軍を中心として積極的に武器輸出を行った。

連合国側に対するこうした武器や弾薬の輸出はそのほぼ全てが有償で行われたものであり、結果的に日本は、これでかなりの額の外貨を獲得した。今日、東京の国立西洋美術館に展示されている絵画類の基となった「松方コレクション」は、その多くは船舶不足で悩むイギリスに対する船舶の輸出で得た利益を元手に収集したものである。

第四が、この論考の以下での主題となる地中海での護衛任務である[13]。実は、日本はこうした関与以外にも第一次世界大戦を通して、ヨーロッパ西部戦線や東部戦線への陸軍の派遣、アデン湾（紅海）に対する遠征軍の派遣、あるいはアメリカ大陸の大西洋沿岸への海軍の派遣など、要員や物資不足に苦しむ連合国

---

[11] Tomoyuki Ishizu, "Japan and the First World War," in BCMH ed., *World War One 1914-1918* (Sofia:St.Kliment Ohrisdki University Press, 2015); Tomoyuki Ishizu, "Navy Squadron in the Mediterranean (Japan)", in 1914-1918 Online International Encyclopedia of the First World War (Berlin: Freie Universität Berlin, 2014~).

[12] 「ブロシロフ攻勢」について詳しくは、Ian F. W. Beckett, *The Great War, 1914-1918* (Harlow and New York: Longman, 2001) を参照。

[13] Sadao Asada, *From Mahan to Pearl Harbor: American Strategic Theory and the Rise of the Imperial Japanese Navy* (Annapolis: US Naval Institute Press, 2006); Paul G. Halpern, *The Royal Navy in the Mediterranean 1915-1918* (London; Temple Smith, 1987); Nish, *Alliance in Decline*, pp. 115- 157.

側から何度にもわたってさらなる支援要請を受けていたが、基本的にその全てを断っていた。

こうした中、1916 年 12 月に日本はイギリスから地中海への艦隊派遣要請を受けることになるが、もちろん日本としても、この護衛任務と引き替えに西太平洋でのドイツ領南洋群島の日本への割譲など、戦後の講和会議を見据えた上でこの要請を受諾した[14]。実際、日本は第一次世界大戦後のヴェルサイユ講和条約で新たに創設された国際連盟により、この南洋群島の赤道以北を委任統治領として事実上占有することになった[15]。

地中海での護衛任務

前述したように、1914 年 8 月、日本は日英同盟の情誼により第一次世界大戦に参戦した。当初から日本は、ドイツ東洋艦隊の基地であった山東半島の青島（チンタオ）攻略、西太平洋のドイツ領南洋群島の占領など積極的に関与を続けたものの、1917 年までの関与は、基本的にアジア太平洋を中心とする地域に限定されていた[16]。そうした状況の下、ヨーロッパでの要員及び物資不足、さらにはドイツ潜水艦による連合国側船舶への攻撃の脅威が高まる中、日本はイギリスからの要請に応じる形で 1917 年 4 月から第二特務艦隊を地中海に派遣し、ドイツ潜水艦に対して連合国側船舶を護送する任務に就いた。

第二特務艦隊は佐藤皐蔵（こうぞう）少将を司令官とし、当初は巡洋艦「明石」と駆逐艦 8 隻が派遣されたが、その後、「明石」の代艦として装甲巡洋艦「出雲」が、そして、1917 年 2 月に開始されたドイツの無差別潜水艦作戦に対応するために駆逐艦 4 隻が増派された（実際にはスループ艦 2 隻やイギリス海軍から貸与された駆逐艦 2 隻などの運用でその規模はさらに大きくなる）。この特務艦隊は、当時はイギリス領であった地中海のマルタを基地として、主にマルタ＝マルセイユ（フ

---

[14] Nish, *Alliance in Decline*, p. 228.

[15] Nish, *The Anglo- Japanese Alliance*, pp. 23- 95.

[16] 日本軍による青島攻略について詳しくは、John Dixon, *A Clash of Empires: The South Wales Borderers at Tsingtao, 1914* (Wrexham: Bridge Books, 2008) を参照。

ランス)、マルタ＝タラント（イタリア)、そして、マルタ＝アレキサンドリア（エジプト）を結ぶ海上交通路での護衛任務を中心に活動することになる[17]。

形式上、第二特務艦隊は独立して任務を遂行することになっていたが、現実にはマルタのイギリス地中海艦隊司令官の「命令」を受けて活動した。史料によって少し数字は異なるが、ある史料によれば第二特務艦隊は348回にわたって護衛任務を実施し、連合国艦艇及び輸送船788隻を護送、約75万の要員を護送すると共に34回の戦闘行動があった[18]。ドイツ潜水艦に対する戦果は大きいと報告されていたが、戦後の調査によれば、撃沈した潜水艦は1隻もなかった。

こうした護衛任務の実態については今日、片岡覚太郎の『日本海軍地中海遠征記』などによってその一端をうかがい知ることができるが、この論考では以下の3つのエピソードを紹介しておこう。

第一は、1917年5月、第二特務艦隊がドイツ潜水艦による魚雷攻撃を受けて沈没したイギリスの客船「トランシルヴァニア」（要員及び軍事物資を輸送）の救助活動を2隻の駆逐艦で行い、その乗員約3,300名のうち3,000名を救助したことである。

なるほど、この護衛活動そのものは「失敗」との評価も可能であるが、ドイツ潜水艦がまだ近海に潜んでいることを承知の上で実施されたこの救助活動に対しては、イギリス国王より27名の日本海軍将校及び水兵に勲章が授与された。

第二のエピソードは悲劇的なものであった。駆逐艦「榊」が1917年6月、クレタ沖の東地中海でオーストリア潜水艦から魚雷攻撃を受けて大破、艦長以下59名の死者を出す惨事となった。

第三は、1918年春の西部戦線におけるドイツ軍の大攻勢「カイザーシュラハト」を受けて、連合国側は要員や物資を大量にヨーロッパに送り込むことが喫緊の課題となった。周知のように、この攻勢はドイツ軍が通常の歩兵部隊よりも先に、自動小銃、機関銃、そして歩兵砲などを装備した「浸透部隊（突撃部隊)」を緩やかな鎖状となって展開させたことに大きな特徴があり、第二次世界大戦におけ

---

[17] 地中海での日本海軍の活動については、片岡覚太郎著、C.W.ニコル編集『日本海軍地中海遠征記――若き海軍主計中尉の見た第一次世界大戦』河出書房新社、2001年に詳しい。

[18] Ishizu, “Navy Squadron in the Mediterranean (Japan).”

る「電撃戦」という概念の一つの源となったものである[19]。

すなわちこの部隊は、突破が可能な地点であればどこへでも直ちに突入し、敵の防御が強固な場所は後続の部隊にその処理を任せたのである。速度の一番遅い者ではなく、最も速い者に部隊全体の歩調を設定しているため、部隊の一体性を維持することは必要なかった。その結果、この大攻勢でのドイツ軍最前線はフランスの首都パリから約 100 キロの地点にまで進攻できたのである。

このような状況の下、西部戦線を崩壊させないためにも連合国側は、地中海でアレキサンドリアとマルセイユ間を「ビッグ・コンボイ」と呼ばれる集団での護送船団方式を用いて、ドイツ潜水艦の脅威に対抗しながら要員や物資を輸送することを決定した。そして、ここでも活躍したのが第二特務艦隊であり、往復 5 回にわたるこの任務で日本は中核的な役割を果たすと共に、最小限の被害で船団を護送することに成功した。

日本の関与に対する評価

決して派手とは言えないものの極めて重要なこうした日本海軍の護衛任務に対しては、イギリス海軍軍人を中心にその実態を知る人々から高い評価を受けることになる。ある歴史家の言葉を借りれば、「こうした日本の貢献、とりわけドイツ潜水艦との戦いをめぐる決定的に重要な時期においての貢献は、殆ど忘れ

---

[19] 第一次世界大戦におけるヨーロッパ西部戦線での戦いの様相、さらには「浸透戦術」について詳しくは、Tim H. E. Travers, *The Killing Ground: The British Army, the Western Front and the Emergence of Modern Warfare, 1900-1918* (London: Allen & Unwin, 1987); David French, *British Strategy and War Aims 1914-1916* (London: Allen & Unwin, 1986); Peter Simkins, *Kitchener's Army* (Manchester: Manchester University Press, 1988); John M. Bourne, *Britain and the Great War, 1914-1918* (London: Arnold, 1989); Robin Prior and Trevor Wilson, *Command on the Western Front* (Oxford: Blackwell, 1992); Robin Prior and Trevor Wilson, *The First World War* (London: Cassell, 1999); Gary Sheffield, ed., *Leadership and Command* (London: Brassey's, 1997); Gary Sheffield, *Leadership in the Trenches* (London: Macmillan, 2000); Gary Sheffield, *Forgotten Victory: The First World War, Myths and Realities* (London: Headline Book, 2001); Paddy Griffith, *Battle Tactics of the Western Front* (New Haven: Yale University Press, 1994); Paddy Griffith, ed., *British Fighting Methods in the Great War* (London: Frank Cass, 1996) などを参照。

去られているものの、決して小さなものではない[20]」。

だが、残念ながら地中海でのこうした第二特務艦隊の活躍は、おそらく第二次世界大戦の記憶とも相まって、ヨーロッパ諸国やアメリカはもとより、日本でも殆ど顧みられることはなかった。この護衛任務に限らず、いつの時代においても戦争でのロジスティクス（あるいは兵站）の重要性は決して忘れてはならず、その意味においても、ヨーロッパ西部戦線を文字通り「下から支えた」第一次世界大戦での日本海軍の活躍は、正当に評価されてしかるべきである[21]。

今日、地中海のマルタ共和国を訪問すると、この護衛任務で戦死・病死した78名の日本海軍軍人のために1918年に建立された記念碑を見ることができる。また、この記念碑が立つ「英連邦（コモンウエルス）戦没者墓地」には、78名の戦病死者のうち73名の遺体が埋葬されている。

皮肉にもこの記念碑はその後、第二次世界大戦の「マルタの戦い」でドイツ軍機の爆撃によって破損し、戦後もしばらくそのまま放置されていたが、1973年、日本側関係者の尽力によって再建されたという[22]。

地中海での護衛任務を考えるに当たって惜しむらくは、この任務を経て得られた様々な貴重な「教訓」、例えば通商破壊戦の重要性、海上封鎖と潜水艦戦・対潜水艦戦の重要性、機雷や魚雷の有用性、武装商船（マーチャント・ネイビー）や護送船団方式の有用性が、その後、1920年代及び30年代の日本海軍の作戦計画などを通じて、太平洋戦争での海上での戦いにあまり反映されなかった事実である[23]。

---

[20] Halpern, *The Royal Navy in the Mediterranean 1915-1918*, p. 496. 併せて、Nish, *Alliance in Decline*, p. 228 にも同様の高い評価が見られる。

[21] 戦争におけるロジスティクス（兵站）の重要性については、マーチン・ファン・クレフェルト著、石津朋之監訳・解説『補給戦――ヴァレンシュタインからパットンまでのロジスティクスの歴史』中央公論新社、2022年を参照。

[22] 第二次世界大戦の「マルタの戦い」については、例えば、Gerhard Weinberg, *A World at Arms: A Global History of World War II* (Cambridge: Cambridge University Press, 1994), pp.348-363を参照。

[23] Asada, *From Mahan to Pearl Harbor*.

おわりに

確かに、第一次世界大戦全体を俯瞰すれば、例えばヨーロッパ西部戦線での「ヴェルダンの戦い」や「ソンムの戦い」での惨劇とその膨大な犠牲者数――エーリヒ・マリア・レマルクの小説及び映画『西部戦線異状なし（*Im Westen nichts Neues*）』などで示されたこの戦争の「記憶」――と比べれば、第二特務艦隊による地中海での護衛任務など一つの小さなエピソードに過ぎない[24]。

モードリス・エクスタインズの著『春の祭典』の表題に見事なまでに示唆されているように、第一次世界大戦、とりわけ西部戦線での戦いは、まさに 1913 年にパリで初演されたイーゴリ・ストラヴィンスキー作曲のバレエ音楽「春の祭典（*Le sacre du printemps*）」が、ヴァーツラフ・ニジンスキーの振付と共にヨーロッパの人々を驚愕させたのと同様、人々の「世界観」を一変させる出来事であった[25]。

また、この戦争の海上での戦いに限っても、「ユトランド沖海戦」などが第一次世界大戦全体の帰趨に及ぼした影響と比較すれば、地中海での護衛任務の重要性は決して高いものとは言えない[26]。さらには、同じ地中海での護衛任務を考えても、1917 年 4 月に遅れてこの戦争に参戦したアメリカが大規模な海軍を地中海や大西洋に投入して活動した事実と比べても、この護衛任務があまり人々の記憶に残るものではないことは事実である[27]。その意味において、第一次世界大戦全体における日本の関与については過大に評価されてはならない。

しかしながら、1917 ～ 18 年の期間、第二特務艦隊が日本から遠く離れた地中海で黙々とその任務を遂行して一定の評価を得た事実は、同じ日本人として記憶に留めておく必要があろう。実際、武器や弾薬の輸出といった間接的な支援とは異なり、地中海での直接的な護衛任務は、日本が連合国側の一員として第一

---

[24] 第一次世界大戦の全体像を知るためには、Strachan, ed., *The Oxford Illustrated History of the First World War* が最も優れた著作であろう。

[25] Modris Eksteins, *Rites of Spring: The Great War and the Birth of the Modern Age* (London: Bantam Press, 1989)（モードリス・エクスタインズ著、金利光訳『春の祭典――第一次世界大戦とモダン・エイジの誕生』みすず書房、2009年）.

[26] Paul G. Halpern, *A Naval History of World War I* (Abington; Routledge, 1994), p. 393.

[27] 地中海でのアメリカ海軍の活動については、例えば、*The Times History of the War* (London: Times Publishing Company, 1919), Vol., XVIII, p. 449を参照。

次世界大戦を共に戦っているという事実をヨーロッパの人々に明確に示し得た数少ない機会であった。そして第一次世界大戦後、この護衛艦隊がイギリスをはじめとするヨーロッパ諸国を訪問したことで、この戦争の勝利に対する日本の関与についてヨーロッパの人々は認識を新たにしたのである[28]。

この論考を終えるに当たり、第一次世界大戦後の国際秩序すなわち平和について考えてみれば、戦勝国である日本は、戦後の国際秩序であるヴェルサイユ体制やワシントン体制を維持することに利益があるはずであり、実際、維持すべきであった。だが、日本が逆にこうした体制を積極的に打破する政策を打ち出した事実は、その後の日本の悲劇を予感させるものであった[29]。

（註）本論は、石津朋之「第一次世界大戦開戦 100 周年を迎えて――日本の関与を中心に」NIDS コメンタリー第 38 号（2014 年 1 月 24 日）を加筆及び修正したものである。

---

[28] Nish, *The Anglo- Japanese Alliance*, pp. 365- 377; Nish, *Alliance in Decline*, pp. 115- 157; Peter Lowe, *Great Britain and Japan, 1911-1915*, pp. 177- 219; Dickinson, "Japan" in Hamilton, Herwig, eds., *The Origins of World War I*, pp. 300- 336; Paine, *The Wars for Asia 1911- 1949*, pp. 13- 47.

[29] Murray, Ishizu, "Introduction to Japan and the United States," in Murray, Ishizu, eds., *Conflicting Currents*, pp. 1- 17; Bailey, *Great Power Strategy in Asia*, pp. 61- 84. また、日本の対アジア政策の変遷については、Frank Dikotter, *The Construction of Racial Identities in China and Japan: Historical and Contemporary Perspective* (Stanford: Stanford University Press, 2006), pp. 101- 104, 160- 161.; Naoko Shimazu, *Japan, Race, and Equality* (London: Routledge, 1998), p. 115; Frederick R. Dickinson, *War and National Reinvention: Japan in the Great War, 1914-1919* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1999), pp. 84- 116; Frederick R. Dickinson, *World War I and the Triumph of a New Japan, 1919- 1930* (New York: Cambridge University Press, 2013), pp.1- 22 を参照。